

介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 利用者氏名：K・M様（女性・90代） 要介護3
利用期間：平成28年8月末～現在に至る
病名：腰椎圧迫骨折・右肩筋3本切断・アルツハイマー型認知症・突発性血小板減少症・白内障
入所までの経緯：長男夫婦と同居、長男妻が主介護者であったが腰痛を発症し介護力の低下から施設入所となった。施設生活という日常生活のなかで意欲や活力を創造し、今日は何があるんだろう?というワクワクするような1日を提供できるようにユニット全体で取り組んでいる症例の報告をいたします。

内 容

M様は3度の腰椎圧迫骨折により入所当時から腰痛の訴えが頻繁にあり、性格的に不安が強くマイナス思考、その為か眩暈や頭痛も頻繁に訴え、薬に対しての依存も強く意欲の低下が著しくなっていました。他ご利用者との交流も少なく、食事とりハビリ以外は臥床して過ごし10分おきにトイレの訴えもありました。時間の経過とともに他ご利用者との交流も増え落ち着いてきましたが「歩けるようになれるかな??」と話しながらも腰痛や不安・マイナス思考により「横になりたい」と話されることも多く離床時間を延ばす事が出来ない状態が続いていました。離床時間を増やし、機能低下防止、意欲向上に繋げ「また歩きたい」という希望に一歩でも近づける様にチームで話し合い、洗濯物たたみやチラシの紙箱折り等、体調に合わせて少しずつ役割を担っていただきましたが中々続きません。しかし声掛けや視点を変えて「横になりたい」と思いではなく「起きて一緒に参加したい」という気持ちを持っていただきたいとチームで検討しました。

M様は民謡が好きで踊りに強い興味がある事、お洒落が好きであった事、地元愛が強い事等の情報を共有し、おやつ前から夕食後までなるべく離床を促す事としました。

始めは「何だかなあ、起きていられるか自信ねえな」と話していましたが、「皆でコーラスしましょう、秋の歌を合唱してクリスマスに披露しましょう」「踊りを一緒に踊りましょう、良かったら教えて下さい」等声掛けを続け離床時間を確実に増やしていきました。それに加え、地元の番組が放送される度に「Mさん、地元がテレビでやっているよ♪起きて観ましょうよ」という声掛けもいたしました。震災で激しい被害を受けた地元の復興に目をキラキラさせ「何だか立派になったなあ」と同郷の入居者様と喜んでおられる場面も見受けられました。また毎日離床時間を計り、ご本人にも『起きていることが出来た時間』を伝える・記録する事で達成感が湧いてこられたようで徐々に離床時間を増やす事ができました。

起きている時間が長いほど、マイナス思考も減少し他者との交流や笑顔の場も増えてきました。腰痛の訴えも少なくなり、夢中になる事が多くなるとトイレの訴えも減少しました。ご家族も面会時「何だか最近明るくなってきました。前より話すことも笑顔も増えました」と喜びの声も聞かれています。

現在は「今日は??何かあるかい??」と尋ねるほどにまでになられています。

今後もM様の『日々違った輝きが持てる日』を提供できるようチーム一丸となって支援を行いたいと思います。